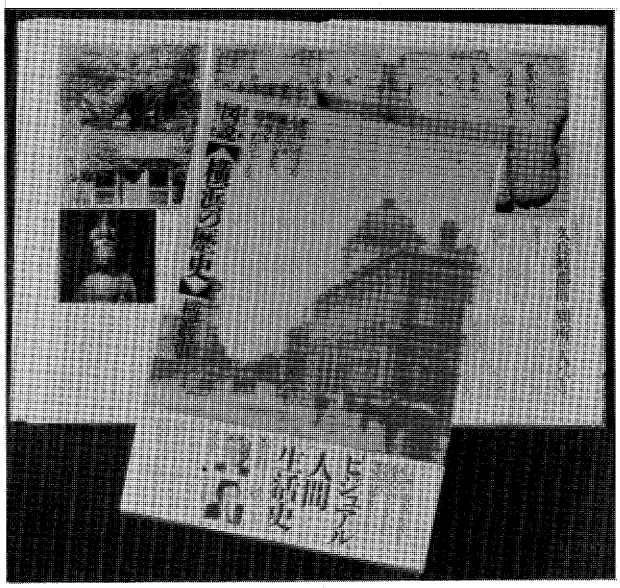
新書紹介

図説・横浜の歴史

「図説・横浜の歴史」編集委員会

横浜市　A4判　四四八頁　三、二〇〇円



『図説・横浜の歴史』は、四月一日に五万部を発刊し、その万部が売れ、現在も好評発売中。市政一〇〇周年・開港一三〇周年という歴史の重みに対する、内外の関心の度合がうかがえる。

〝ビジュアル人間生活史〟とうたったように、オールカラーで紹介した数多くの図版類がセールスポイントだが、内容的に、特に市職員のみなさんに注目してほしいのは、本文約四五〇ページのうち三分の一以上の約一八〇ページを、開港以前（先土器時代～江戸時代）の市域の歴史にあてた点である。

そこでは、港北ニュータウン地区などにおける発掘調査の成果や、全国各地から収集した市域に関連する古文書・絵図などを紹介して、開港に至るまでの市域の人々の生活のあゆみを追った。たとえば、六浦湊や神奈川湊を中心とした中世の海運の様子、東海道の整備による近世の交通の発達などを描きながら、鎌倉や江戸に置かれたそれぞれの時代の政権と、市域の人々とのつながりにも触れた。

これまで「横浜の歴史は開港から」と言われることが多く、開港以前の様子と言えば、「戸数一〇〇戸たらず、半農半漁の小さな村」というような表現ですまされがちであった。港北、戸塚、金沢などの周辺部は…というと、あたかも市域に編入される際に突然出現したかのごとくに語られることもあった。一方でそうした周辺地域の郷土史研究が盛んだが、それらは、いわゆる「横浜の歴史」とは別世界のことのように扱われることが多かった。

『図説・横浜の歴史』は、市域の人々の生活史として、それらを統一的な世界に描いた。それがうまくいっているかどうかも含めて、みなさんに、ぜひ注目してほしいと思う。

日本第二の大都市・横浜は、この一〇〇年の間に、それぞれ独自の歴史をもった周辺の地域を呑みこむようにして市域をひろげ、海を埋めたて山を削り、住宅地や工業地帯をつくってきた。そのあゆみは、けっして過去の伝統的世界からストレートに未来につながるものではなく、むしろ〝断絶〟や〝創造〟という側面も多いように思われる。そうした流れを統一的な世界として描くことは想像以上に難しいことであり、約四五〇ページというボリュームも、三〇〇万都市のあゆみを語るにはあまりにも少ないのかもしれない。編集にあたっては、見開き二ページごとにひとつのテーマを設定するテーマ中心主義で読者の便宜を図ったが、その構成に強引さが感じられるとしたら、それは、横浜の歴史自体が内包する、ある意味で強引な流れの反映であろう。

個人的な感想だが「誰にもわかりやすく、流れがすぐに頭に入るようにまとめたのでは、この街の歴史の記述としてはむしろ不正確なのではないか」という気がしている。他の記念刊行物を担当された方々の感想も聞いてみたい。

〈市民局　村田和義〉